



読書感想文コンクール特別大賞

「ぼくの神さま」を読んで

物質工学科 二年五組 茅 根 愛

人間はこの世に生まれ、たくさんの人々と出会い、苦しくて辛い事、楽しくて元気になる事など数多くの経験をし、成長していく中で、生きる意味や命の大切さ、友情、人としての強さを学ぶ。そんな事を学んだこの本は、ナチス軍によるユダヤ人の強制連行を背景に、田舎の村に逃げる事になった十一歳の少年が、そこで出会った人々との生活と平和だった村に侵攻してきたナチス軍の恐怖、そんな中でも懸命に生きるというストーリーである。

まず最初に感じた事は、主人公である十一歳の少年ロメックの強さだ。両親とのあまりにも急で辛すぎる別れを経験し、全く知らない人々の中で生活をした。それだけでもどれだけ悲しく辛い思いをしただろう。まだ十一歳なのに「一」と思った。小さな体で見知らぬ場所で窮屈な思いをし、なかなか居場所が見つけれず、お世話になった人、大切な友人の死に直面しても、自分を見失わず、生き抜いた姿に、まだ十一歳の少年に、強さを感じた。両親との急な別れでも小学生であるロメックからすれば大変な出来事でもあるのに、「死」という永遠の別れ。私だったら耐えられない事だと思う。そんな事に直面したのが自分なら、当然、冷静でいる事など不可能だろう。そして、自分が自分である事もできなくなってしまうかもしれない。生き続けていく事だってできないかもしれない。ロメックと私には六歳の年の差があるが、精神的には、はるかに彼の方が上だろう。どんな事が起きても一生懸命に生き、めげず、大切な友達を信じ抜き守ろうとする。そんな事がロメックを強く、大きくしたんだと思った。私もどこかでロメックのような強さが欲しいと思ったのかもしれない。私は嫌な事が起きるとすぐに逃げたくなる。ロメックのような強さがあれば立ち向かっていける気がする。

次に、この本には教えられた事がある。それは、

友情だ。ロメックの田舎の村で出会った十二歳と六歳の男の子との友情である。悲しみ、恐怖の中でどんどん強く深くなっていく友情に、かなりの大きさを感じた。お互いを思いやる優しさ信じ合う事、どんな時でも助け合い守ろうとする事。まだ六歳の幼い男の子が自分の大切な人を守るため、小さな頭でたくさん考え、考え抜いた末、死を選択し、友を助けた事に、まずは彼の大切な人には生きて欲しいと願う心、そして大切な兄と友を思う大きさに心を打たれた。どれだけ強い絆で結ばれていたのだろう。私たちにはわからない強さ・大きさだったんだと思う。本当に心から大切に、大事に思っていれば自分を投げ出しその人たちのためにできる事があるのだろう。強い友情があるのなら。

六歳の男の子から感じた友情に対するたくさんの事を無駄にせず忘れず、大きく強い友情を作っていこう。楽しくて安心できる友達、何でも言い合えて励ましてくれる、頼れる、どんな時でも応援したくなる、そんなたくさんの友達がいる。すべての人に同じようにとはいかないかもしれないが一人一人本当に大切な友達だから、ロメックたちのような強く深く大きな友情を作っていきたい。そう思えるようになったのはこの本のおかげだ。

私は平和な時代に生きている。だから、彼らのような辛く悲しい事に直面する可能性は低い。だが、彼らから見習うべき所は多い。彼らから教わった友情、人としての強さ、どれも生きていく中では大切な事だ。これから多くの人々に出会っていくだろう。そんな中で人として大きく、そして本当に大切な人との大きく深く強い友情を作って成長したい。人への思いやりを忘れず、自分を見失わず今の友情をもっと強いものにしていきたい。この本を読んだ事でこれからのいい意味で変わっていききたい。この本は私に、人を信じる勇気を与えてくれた。